

水稻技術情報 No 1

～種子予措から播種のポイント～

1 育苗期間の気象予報

表-1 3月から5月までの天気の見通し（新潟地方気象台 2月25日発表）

月	出現の可能性の最も高い天気の見通し			
	気温	降水量	日照時間	降雪量
3	天気は数日の周期で変わる			
	低10：並30：高60	低30：並40：高30	平年並	少ない
4	天気は数日の周期で変わる			
	低20：並40：高40	低30：並40：高30	平年並	—
5	天気は数日の周期で変わる			
	低20：並40：高40	低30：並40：高30	平年並	—

注：各月の日照時間と降雪量は出現する可能性のもっと高い階級を予報している。

※ 3月の気象は気温が高めに推移すると予報され、急速に雪解けが進む見込みである。また、4月以降の気温が高めに推移する見込みのため、浸種や育苗ハウスの温度管理には十分な注意しよう。

2 種子予措 ☆☆早植え厳禁！4月20日のタネまき励行！

(1) 育苗計画

田植え計画と（表-2）の育苗日数を勘案し、
適正なタネまき作業計画を立てよう！
高品質米生産に向けて、4月20日以降播種、
5月10日以降田植えを実践しよう。

表-2 育苗日数

稚苗（加温）	16～18日
稚苗（無加温）	20～22日

(2) 塩水選～種子消毒（薬剤消毒の場合）

塩水選 4月5日 ～タネまきの15日前～

購入種子であっても塩水選を行うことで、不良籾を取り除き充実度の高い健全な種子になる。

表-3 比重液の作り方

	比重	水10ℓに対する量	
		食塩	硫酸
うるち	1.13	1.9 kg	2.5 kg
もち	1.08	1.1 kg	1.4 kg

※ 溶液の比重は比重計により確認する。
比重計のない場合は右図参考のこと。

【生卵と塩水比重のめやす】

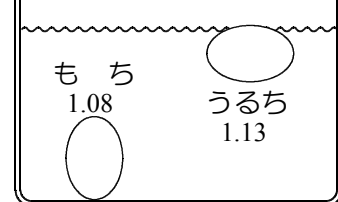


図-1 生卵を使った比重の目安

水洗 4月5日 ～タネまきの15日前～

塩水選後すぐに発芽不良等を起こさないよう種籾を真水で良く洗う。塩水を洗い流した後、種子袋（サラン袋）に余裕を持たせて種籾を入れる（7分目）。

種籾を種子袋に詰めすぎると、消毒ムラ・催芽ムラの原因となるので注意。

水切り 4月5日

種子袋の水を軽く切ってから種子消毒を行う。湿粉衣する場合は、握ったときに籾が手につかない程度に乾燥させる。

消毒 4月5～6日 ～タネまきの14～15日前～

<処理方法別留意点>表-4

湿粉衣 塗沫	塩水選後、水切りを十分行った（籾を握って手につかない程度）あとに処理する
高濃度・低濃度浸漬	○種子籾は、網袋の7分目程度に充填する。 ○ 発芽不良防止のため薬液の温度は10℃以下にしない。<重要> ○薬液量は種籾容量の1.2～1.5倍とする。（種籾1kg に対し薬液約2～2.5ℓの割合） ○浸漬時には種子袋を薬液内でよくゆする。

<消毒方法と防除効果>

- ◎低濃度浸漬よりも湿粉衣・種子塗沫・高濃度浸漬が効果的に安定している。
- ◎低濃度浸漬は24時間浸漬するため、風乾以降の作業が1日程度多くかかる。

↓ <残液処理>

◎消毒後の残液は、適正に処理し河川等に絶対に流入させない。

風 乾 4月5日または6日

◎低濃度浸漬は24時間種子消毒後は風乾し、薬剤を種粒に良く付着させた後に浸種に移す。

浸 種 4月6～7日 **～タネまきの13日前～**

◎発芽を揃えるため、積算温度（水温×浸種日数）100℃を目安に浸種を行う。

◎浸種する水の量は種子粉容量の2倍程度とする。

（種子粉1kgに対し水約3.5ℓ）

◎浸種温度は10～15℃前後とし低水温下では浸種日数不足に注意する。

※特に、銅を含む種子消毒剤を使用した場合は、10℃以下の低温で浸漬しない。

◎種子消毒効果を高めるため消毒開始から4日間は水を取り替えない。その後浸種終了までに2～3回新しい水に更新する。

催 芽 4月18日 **～タネまきの2～3日前～**

◎**温度は30℃**、日数は2日程度を目安とし、以下の点に注意する。

※30℃以上になると細菌性病害等の多発生が懸念されるため注意！

◎発芽状態はハト胸程度とし、発芽率が80%以上になるよう催芽時間を調節する。

◎播種する前に種粒を握っても手に粉がつかない程度に脱水もしくは陰干しする。

タネまき 4月20日

表-5 適正播種量と必要箱数（稚苗）

乾 粉	140～150g／箱
催 芽 粉	170～180g／箱
必要箱数	50株植え→約15箱／10a 60株植え→約18箱／10a

◎適正播種量を厳守しよう。

3 床土の準備

◎床土量は1箱当たり3.5～4ℓ（うち覆土に約1ℓ）必要である。稚苗育苗において10a当たり必要箱数を18～20箱とした場合、10a当たり70～80ℓ程度の床土が必要。

◎ピートモスを容量で4分の1程度混合すると、埴壤土は透水性が良くなり、砂壤土は保水性を増して好適な床土となる。

◎人工床土は床土水分が低いので、播種時の灌水量不足にならないよう注意する。

◎薬剤防除

処理方法	薬 剤 名	適用病害				処理時期
		リゾー プス	ヒ ⁺ シウ ム	トリコテ ⁺ ルマ	フサ ⁺ リ ウム	
床土・覆土	タチガレエース粉剤		○		○	播種前
全層混和	ダコニール粉剤	○				

注) ダコニール粉剤は覆土のみに混和処理して良い。ただし、覆土への混和量が10gを超えると根上がりが発生するため使用量に注意。

タチガレエース粉剤は床土のみの混和処理でも良い。ただし処理量は登録の最少量とする。

農薬の使用に当たっては、「農薬使用者」の責任を理解し、「農薬使用基準」を遵守し使用してください。また、最新の情報により「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「総使用回数」及び「使用方法」を確認してください。

4 温湯消毒 ～環境にやさしい種子消毒方法の紹介～

※薬剤消毒に比べ消毒効果が劣る（特に褐条病）ことに留意する。

塩水選 4月4日 ～タネまきの16日前～

購入種子であっても塩水選を行うことで、不良粉を取り除き充実度の高い健全な種子になる。

【生卵と塩水比重のめやす】

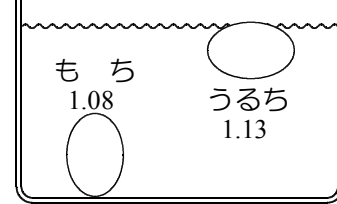


表 比重液の作り方

	比重	水10ℓに対する量	
		食塩	硫安
うるち	1.13	1.9 kg	2.5 kg
もち	1.08	1.1 kg	1.4 kg

※ 溶液の比重は比重計により確認する。
比重計のない場合は右図参考のこと。

図 生卵を使った比重の目安

水洗い 4月4日 ～タネまきの16日前～

塩水選後すぐに発芽不良等を起こさないよう種粉を真水で良く洗う。塩水を洗流した後、種子袋（サラン袋）に余裕を持たせて種粉を入れる（7分目）。種粉を種子袋に詰めすぎると、消毒ムラ・催芽ムラの原因となるので注意。

風乾 4月4～7日 ～タネまきの16～13日前～

3日間程度広げて風乾し、**完全に乾かす**。

温湯消毒 4月7日

- ◎ **必ず乾燥粉を使用する**。（乾燥が不十分な粉では発芽率が著しく低下する）
- ◎ 専用機械で **60℃10～15分間** の処理を遵守する。処理後直ちに冷水で冷やす。
- ◎ もち品種等で発芽率が低下する場合があるので、あらかじめ少量を試して処理し、発芽率を確認する。発芽率の低下が著しい場合は種子消毒に切り替える。
- ◎ 褐条病対策として、タフブロックの催芽時浸漬または催芽時食酢利用による体系処理がある。

浸種 4月7日

- ◎ 発芽を揃えるため、積算温度（水温×浸種日数）100℃を目安に浸種を行う。
- ◎ 浸種する水の量は種子粉容量の2倍程度とする。（種子粉1kgに対し水約3.5ℓ）
- ◎ 浸種温度は10～15℃前後とし低水温下では浸種日数不足に注意する。
- ◎ 温湯消毒した種子と無消毒または薬剤消毒の種子を一緒に浸種しない。
- ◎ 通常より発芽が早まる傾向があるため、種子をこまめに確認する。また、雑菌が繁殖しやすいため、水替えを早めに行う。

催芽 4月18日

- ◎ **温度は30℃**、日数は2日程度を目安とし、以下の点に注意する。
※30℃を超えると細菌性病害等の多発生が懸念されるため注意！
- ◎ 発芽状態はハト胸程度とし、発芽率が80%以上になるよう催芽時間を調節する。
- ◎ 播種する前に種粉を握っても手に粉がつかない程度に脱水もしくは陰干しする。

＜体系処理による褐条病対策＞

- ◎ タフブロックの催芽時浸漬は催芽時に200倍液（水100ℓに対してタフブロック500g）に30℃で24時間浸漬する。
- ◎ 食酢を利用する場合は、必ず酸度**4.2%**の穀物酢を使用し、循環式ハトムネ催芽機を用い、水100ℓに対し食酢**2.5ℓ**を添加する。水温**3.0～32℃**に24時間浸し催芽する。催芽後は水洗いせず通常どおり播種を行う。
※風呂桶等に浸けておくよりも循環式催芽機の方が効果が高い。

タネまき 4月20日 ◎適正播種量を厳守しよう。

表-5 適正播種量と必要箱数（稚苗）

乾粉	140～150g/箱
催芽粉	170～180g/箱
必要箱数	50株植え→約15箱/10a 60株植え→約18箱/10a



ラベルを確認

